

通し番号	4359
------	------

分類番号	20-3B-13-01
------	-------------

(成果情報名) 梅干しとして肉質、風味に優れた中粒種と結実良好で核重率の低い大粒種の育成
[要約] 平成9年に自然交雑、平成11年に交雑育種を実施し、梅干し用として品質が優れる品種の選抜を行った。平成9年度自然交雑実生621系統の中から1系統、平成11年度交雑実生180系統の中から1系統を有望と判断した。平成11年度交雑実生99-37-1は梅干し用としては極早生で中粒、梅干し加工後の風味に優れた品種である。平成9年自然交雑実生8-34は結実が連年安定しており、6月中旬に収穫され、核(種子)が非常に小さく、果肉の割合が高いことが特徴の品種である。
(実施機関・部名) 神奈川県農業技術センター・果樹花き研究部 連絡先 0463-58-0333

[背景・ねらい]

ウメの主要産地である和歌山県は神奈川県より温暖であるため、‘南高’等の品種を栽培しても収穫・出荷は和歌山より大きく遅れ、高価格は望めない。

そこで、神奈川県オリジナルのウメ品種の育成に取り組み、新品種として有望なウメ系統を小田原市ウメ研究会と共同で早期に現地にて選抜する。

[成果の内容・特徴]

- 1 平成11年度交雑実生(玉織姫×十郎)の99-37-1は、小田原の現地圃場で5月下旬に収穫される極早生種で、樹勢は中程度である。果実重は20g程度の中粒で、果肉の割合も高く、梅干し加工後の風味(ウメの香り)が優れる。結実は連年安定しており、ヤニ果、陥没果の発生も少ない(表1、図1)。
- 2 平成9年度‘南高’の自然交雑実生である8-34は収穫期は平塚において6月中旬の中生種で樹勢はやや強い。果実重は肥沃な黒ボク土壌では40g程度になり、‘南高’と同様にやや大きくなる。核重率が6.5%と非常に低く、果肉の割合が高い。結実が連年安定しており、ヤニ果、陥没果の発生も少ない(表1、図2、3)。
- 3 8-34は自家結実率が52%あり自家和合性があると考えられ、99-37-1は自家結実率が0.0%で、自家和合性はないものと考えられる(表2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 99-37-1は、平成18年度に小田原市ウメ研究会により梅干しに加工され、平成19年1月に開催された梅干しコンクールで小田原市長賞を受賞している。
- 2 99-37-1は皮がやわらかく破れやすいため、加工の際には注意を要する。

[具体的データ]

表1 選抜した2系統と主要品種の収穫日及び、果実品質の比較(平成19年度)

系統・品種	用途	収穫日	果重 (g)	核重率 (%)	2L 果割合 (%)	ヤニ果 (%)	陥没果 (%)	栽培地
8-34	干	6/20	42.0	6.5	98.6	3.6	0.0	所内
99-37-1	干	5/30	18.2	12.0	0.0	0.0	0.0	小田原
十郎	干	6/20	28.7	10.4	83.0	—	—	所内
南高	兼用	6/20	54.4	8.6	96.7	—	—	所内



図1 99-37-1 (玉織姫×十郎)



図2 8-34 (南高自然交雑実生)

表2 選抜した2系統の交雑和合性検定結果

交雑組み合わせ	交雑数	結実数	結実率(%)
8-34 × 8-34	21	11	52.3
× 甲州最小	4	1	25.0
× 十郎	7	3	42.9
× 南高	5	5	100.0
99-37-1 × 99-37-1	13	0	0.0
× 甲州最小	4	2	50.0



図3 8-34と主要品種果実の比較  
上から‘十郎’、‘南高’、‘8-34’

[資料名] 平成18、19、20年度試験研究成績書(果樹)  
 [研究課題名] 果樹の新品種育成  
                   (2)ウメの新品種の育成  
                   ア ウメの新品種の育成  
 [研究期間] 平成7年度～  
 [研究者担当名] 曾根田友暁・柴田健一郎・関達哉